JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	SC09出張報告
Author(s)	二ツ寺，政友
Citation	国立大学法人北陸先端科学技術大学院大学技術サービス部業務報告集 ： 平成21年度: 94-101
Issue Date	2010-10
Type	Others
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/10019
Rights	
Description	

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

SC09 出張報告

— The Premier International Conference on High Performance Computing, Networking, Storage and Analysis, Nov.15-20, 2009, Portland, OR —

平成 22 年 8 月 31 日
技術サービス部情報科学センター担当
二ツ寺 政友

SC は HPC（High Performance Computing）とその計算機の稼働に必要な各分野の技術・製品等に関した学術発表や各社・各研究機関の展示等が行われる国際会議である。情報科学センターでは、世界の HPC 動向を実際に見聞させ、技術職員の職務遂行に必要な基本、一般及び専門的な知識を習得させ、その資質向上を図るべく、2006（平成 18）年度より毎年技術職員を SC に参加させている。2008 年度からはより積極的に SC に参加するため、JAIST としての展示ブースを出展している。ブース出展 2 年目となる 2009 年度は 11 月 14 日～20 日にアメリカ・オレゴン州ポートランド市にて SC09 が開催され、技術サービス部から技術職員 1 名（筆者）が展示ブース設営から撤収までの期間（11 月 13 日出国～23 日帰国）出張したのでここに報告する。

1. はじめに

SC は元々アメリカの国立研究所の関係者を中心にボランティア的に始められた国際会議で、1988 年アメリカ・フロリダ州オーランド市で第 1 回（SC1988）が開催され、2008 年テキサス州オースティン市で開かれた SC08 で 20 周年を迎えた、世界最大の HPC 関連の国際会議である。HPC とその計算機の稼働に必要な各分野の技術・製品に関した学術発表やワークショップ、各社・各研究機関の展示、その他多彩なイベントが開催される。当初 SC のターゲットは HPC 分野にフォーカスしていたが、HPC の発達、進化におけるネットワーク、ストレージの占めるウエイトは増加の一途をたどり、2002 年にはその正式名称に Networking が、2004 年には Storage and Analysis が追加され、標題に記したとおり現在の正式名称は The Premier International Conference on High Performance Computing, Networking, Storage and Analysis である。2009 年の SC09 は 11 月 14 日～20 日にオレゴン州ポートランド市にあるオレゴン・コンベンション・センター（図 1）にて開催された。ポートランド市での開催はこれで 3 回目である。展示ブースは Intel や NASA といった誰でも知っているような大企業・機関の設ける大規模なものから、大学の学内の一機関や、ある技術に特化したベンチャー企業と思われる企業の小規模なブースまで様々であった。SC09 の Web サイト[a]によると、ブース以外の研究発表なども含め、参加機関は約 320 で[1]、また、SC08 での参加者数は約 11,000 人である[2]。

図 1　オレゴン・コンベンション・センター

[a] http://sc09.supercomputing.org

2. SCへの参加と出展

今回は昨年度のSC08に続いて2回目の自前ブース出展であった。JAIST からはブース設営に関与するかどうかにかかわらず、教員 4 名、技術職員 1 名、学生 3 名が出張した。今回は現地に行く技術職員は私 1 名となったことや、SC06、SC07 の時のように単に学術発表等への参加や各ブースの視察をしていれば良いのと違い、展示に向けた準備、実際の現地での設営・展示・来客対応・撤収などが必要となるため、私の出張期間は 11 月 13 日（出国）から 11 月 23 日まで（帰国）となった。事前に必要な各種手続きや、メンバー現地到着後のフォロー等も含め、SC 経験の豊富な木戸主任技術専門職員をはじめとした学内外の関係各位に多大な助力をいただいた。

SC の参加規約により、教育研究機関であれば最初の出展費用はブース面積を 10 フィート四方に制限されるものの無料となり（JAIST では昨年の SC08 がこれに該当）、次年度（同じく SC09）からは出展費用は有料で展示ブース面積を選択できるようになるため、今回の SC09 では面積を前回の倍の 10 フィート×20 フィートとした。なお 10 フィート四方が大きさの基本の単位である。

展示内容は情報科学研究科松澤研究室の裸眼立体視のデモンストレーションと、JAIST の並列計算機ユーザである各研究室（情報科学研究科から松澤研・井口研・前園研と、先端融合領域研究院から尾崎研）の作成したパネルと、JAIST の全般的な説明を載せたパネルであった。また情報科学センターは同じく SC にブースを持っている日本原子力研究開発機構の ITBL（Information Technology Based Laboratory）のメンバーでもあり、JAIST ブースとほぼ同じ内容の作業を要した。この ITBL ブースでの JAIST でなすべき対応はほぼ全てを前出の学生 3 名（松澤研・井口研から参加）が担ってくれた。

3. 現地での業務内容

11 月 13 日に出国し、現地の同じく 13 日に入国した。事前設営期間では、ブースに既に届けられている荷物の開梱・確認（図 2）や、後から運び込まれたレンタル什器類の受取・組み立て場所の指示・設置確認、ブース自体の組み立てが左右反対になっていたのを、ブース出展者用受付カウンターに言いに行き入れ換えてもらったり、パネルが足りなくなったので買い出しに行ったり、パネル展示のレイアウトを試行錯誤したりといったことをしていた。

会期中は主に JAIST ブース（図 3、図 4）にて、来訪者に JAIST のパンフレットを配ったり、質問等に自分が答えられる場合には答え、答えられない場合には私は研究者ではないのでこの教員にコンタクトを取ってほしいといった案内をしたり、他のブースを視察したりしていた。また、SC10 で出展するためのブースの場所予約会議に出席した。会期終了後の撤収作業については行き違いがあり私自身は作業に最後の最後までは関われなかったのだが、他のメンバーが無事搬出を済ませてくれた。そして 11 月 23 日に帰国した。

図 2　ブースに届いていた荷物の開梱の様子

図 3　SC09 での JAIST ブース完成風景

図 4 会期中のブース風景

4. SC09 出展者としての所感

SC08（展示期間のみ出張した）の際には、会場内の一区画の出入り口にとても近い、人通りの多い場所にブースがあり、裸眼立体視のデモンストレーションがちょうど通る人の目に入る位置にあったこともあり、足を止めてくれたり、実際に話を聞いてくれたりしたお客の数は初めての出展の割には多いと感じた。

これに対して SC09 では SC08 より少ないと感じた。他機関のブースではいかにも出展ありきのように見受けられるところもあったものの、私たちの場合にはそこまで割り切ってはいないはずで「情報科学センターは JAIST として SC に出展している」というアピールだけでなく JAIST の知名度そのものを上げる役目を潜在的に負っている以上、たくさんの人に立ち寄ってほしい。そのためにはどうすればいいのか、SC08 での経験も踏まえて感じている事について自分の中で答えの出ている物とまだ出ていない物とが混在しているけれども、以下に記す。

1) 積極的にお客さんに話しかけていった方がいいのか。
→JAIST は誰が見てもわかる組織では無い以上、「JAIST のことをご存知ですか？」「JAIST は大学院大学です。」等のように声をかけるほうが良いかと思い、(SC08 と) SC09 では折を見て実行した。大学であることに驚かれ、さらに学部のない大学院だけの大学であることに驚かれる。SC10 以降も、ただブース内でじっとしているよりは、たまに人に声をかけるぐらいの方が良いのではないだろうか。

2) 集客のためのノベルティにも力を入れた方がいいのか。
→決め手になっているとは感じられず、展示内容の充実度やブース自体の注目度を上げる工夫の方が先であろう。また、ノベルティ目当てにふらりとやってきてそれだけ持ち去っていく人たちに持って行かれるのも当事者としては時としておもしろくないことがわかった。

3) どんなブースにしたらいいか。
→展示内容については当然ながら並列計算機を用いた研究成果等の発表がメインとなる。これまでの展示の仕方では、通路に面してカウンターテーブルがあり、その奥にあるブースユニット壁面に主に各ポスターを張り出しているため、ブースの奥に入り込んでいかないと各ポスターの内容はわからない。我々のような小さなブースでは、そのカウンターテーブルやブース内にいる自分たちの存在が、却ってお客にブース内へ入って行きにくいと感じさせる雰囲気を作り出してしまっていて、結果的にブースに立ち寄ってくれる人の数を減らしてしまっているのではないだろうか。裸眼立体視のディスプレイという、通りすがりの来場者の足を止めるにはうってつけの仕掛けを持っているので、後はブースの中にお客が入って行きやすい雰囲気作りが大切だと感じた。

ブースの場所について、場所予約会議の順番の時に残されている選択肢の中で短時間の内に選ばなければいけないので、あらかじめ優先順位を決めるなどしておくと良いだろう。人通りの多そうな所にするのはもちろんのこと、ITBL との関係上、ITBL ブースとも近い方が良いようだ。

お客に渡す配布物について、広報室からJAIST 概要などのパンフレットを分けてもらって配っているのに加えて、A4 あるいはA3 用紙 1 枚物の印刷物を用意し、主としてはそちらをお渡しする方が良いのではないだろうか。渡された側もかさばらなくて良いと思う。学術交流協定を結ぶにはどうコンタクトを取ったらよいか、といった質問も皆無ではないので、JAIST 概要のような冊子もこれまで通り必要である。

4) 技術職員としてはブースで何をしゃべるか。→研究的な内容のことはわからなくて十分な説明ができないと思いがちである。しかし「それは私には説明できません。」とすぐ逃げるのではなく、定型的な紹介のカンニングペーパーのような物を用意して、それを見ながらでも良いのでざっと説明をして、内容が深くなってきたり、質問に答えられなかったりした場合には、自分は研究者ではないため該当の研究者にコンタクトしてほしいと伝えて連絡先を紹介する、などの方法がとれるのではないか。JAIST 自体の紹介などについても同じ方法が採れると思う。

5. SC09 出張者としての感想

SC08 の際にも私は出張しており、まったく初めての海外出張ではなかったものの、この時は展示期間中のみの出張だったため、今回 SC09 へ出張するにあたり、事前設営やその後の撤収、SC10 で出展するためのブース場所予約会議に出席することなど、自分につとまるのだろうかという不安をかなり前から感じていた。しかしこれは今となってみれば、現地に行ってしまえば意外と何とかなる（相手も仕事なので何とかせねばならないという場合もある）ので、英語圏内であればということにはなるが、過度に臆することなく、海外出張の機会を今後も得ることができるなら手を挙げたい。現地では、ポスターに使用するボードが足りなくなったため、このような品物はないかと文具店を訪ね歩いたり、JAIST ブースで既に組み上げられていたブースの左右のユニットの位置が逆だったため組み換えを依頼するために受付カウンターに行った際、「What is your question?」と言われてしまったりしながらも、目的は果たすことができたり、といったことがあった。図を書いて説明したり、あるいは相手も「それはこういうことか？」と言い直してくれたりするので、最終的には話は通じ、組み換えてもらうことができた。

海外出張というと語学力や身の安全の確保などが頭をもたげつい尻込みしがちである。しかし、語学力については、繰り返しになるが何とかなるので今のままでも引っ込まずにこれからも出かけるようにしようと思う。同時に、その場、その時間をもっと味わうためにはもっと英語を読む力、聞き取る力、話す力を高くする必要があると感じた。これは、例えば SC 会場で、何が書いてあるのか、なんと言っているのかがわからないので結局展示されている品物を眺めるしかないことも多いためである。身の安全については、公費であることや職員出張旅費制度上の制約などの事情のあることは重々承知してはいるが、会場に近く安心して滞在できる宿泊施設を、一般職員でも金銭的な心配をせずに使うことができるようにご配慮いただければと強く思う。

JAIST ブースでの展示内容、来訪者から受ける質問等ともに、並列計算機ユーザの各研究室の研究成果やそれに関することが主であった。私は普段直接それらの内容に携わらない（技術職員は並列計算機の管理運用にはあたるけれども実際上のユーザではない）ため、そのブースでできることの範囲の狭さを感じた。これまでに参加したことのある他の技術研究会や技術職員研修等の席上で見聞きした、研究的な内容の事柄にも携わっている技術職員の発表等を思い出し、自分もそういった内容の職務をしていた方が良いのだろうか、そうであれば自分ももっと能動的に説明したりする場面を増やせるのではとさえ思った。また、並列計算機のユーザではないため個別具体の研究テーマについてはよくわからないにしても、並列計算機やそれに関連した各機器の仕組み、それらの内

部の各構成要素の働きなどはきちんと理解しておくべきだと思った。

6. まとめ

アメリカ・オレゴン州ポートランド市で 2009 年 11 月に開催された SC09 に、JAIST ブースを出展するために出張した。事前に感じた不安は大きかったが、無事に終え、帰ってくることができた。同じ日程で情報科学研究科松澤研・井口研の博士後期課程の学生 3 名が参加しており、彼らの力による所の大であったことをここに感謝とともに記しておく。今後私が向上させるべき物は何であるかがわかり、とても良い経験をさせていただいた。SC10 は出張参加メンバーではないため、SC11 等でまた機会があるならばぜひ手を挙げたい。

7. 参考

参考までに、日本からの各研究機関の出典ブースの写真をブース番号順に掲載する。一部写真を撮れていないブースがある。また、記載自体の漏れがあった場合にはお詫び申し上げる。

NAIST（※写真無し）

NII

筑波大学

九州大学

同志社大学（※写真無し）

RIST

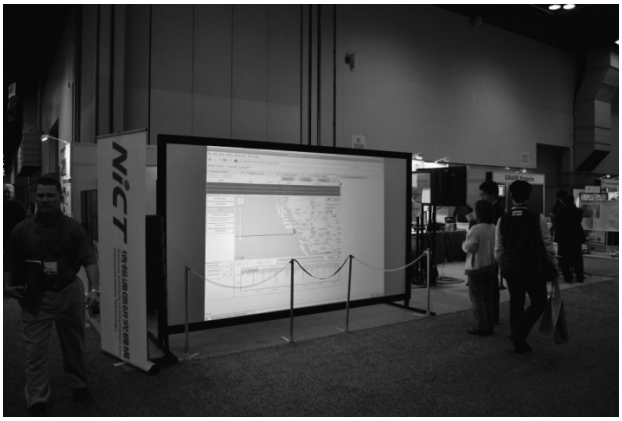
東京大学

東京工業大学

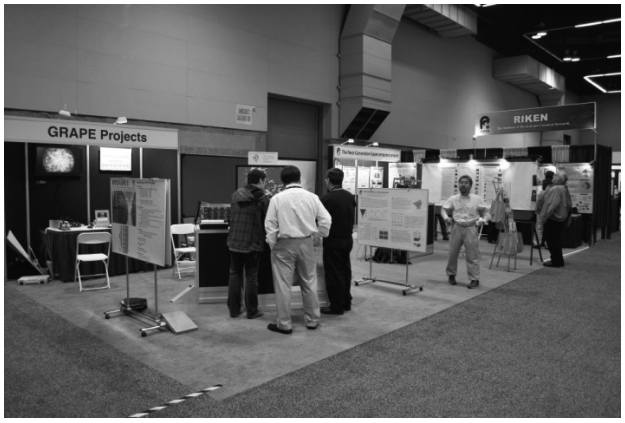
大阪大学

JAEA

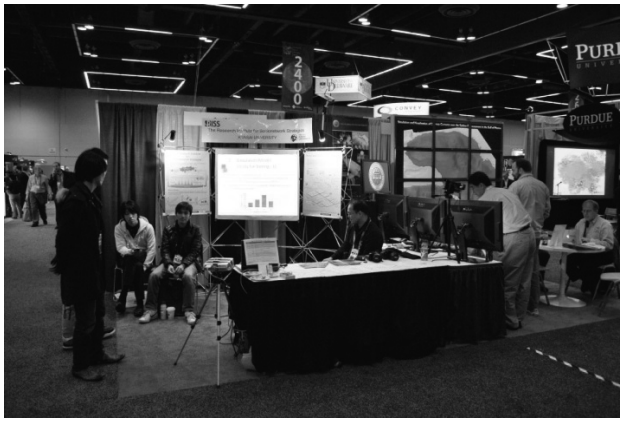
AIST



NICT-NTT

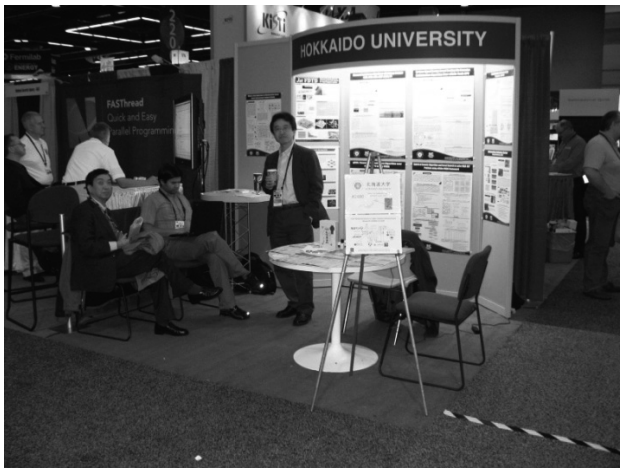


理研-GRAPE Projects



関西大学

JAXA



北海道大学

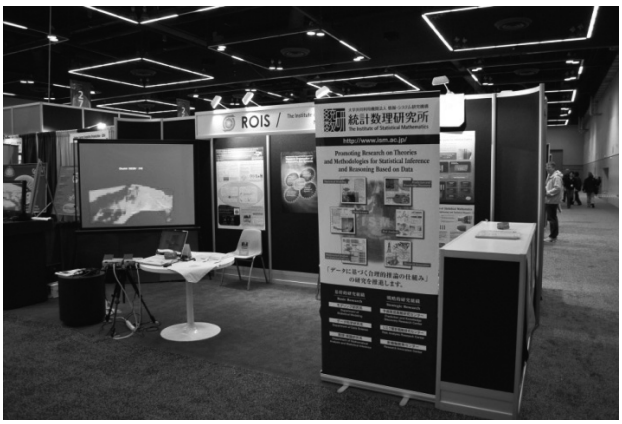
埼玉工業大学-埼玉大学

東北大学

京都大学

JAMSTEC

JAIST



ROIS

以上

T2K

[1] http://scyourway.supercomputing.org/exhibits/by_name
[2] http://sc09.supercomputing.org/?pg=about.html